2020年（令和２年）７月15日（水）中日新聞　掲載

障害ある人に安心観光を

五輪・パラホストタウン　伊勢市がマップ作成中

出入り口や段差　当事者と町歩き意見交換

障害ある人に安心観光を

五輪・パラホストタウン　伊勢市がマップ作成中

伊勢市は、東京五輪・パラリンピックの共生社会ホストタウンの取り組みとして、障害がある人にも観光を楽しんでもらうための地図「バリアフリーマップ」の作成に取り組んでいる。14日には、肢体や視覚に障害がある３人が、伊勢神宮内宮近くのおはらい町やおかげ横丁の関係者、市職員らと、おはらい町通りなどを歩き、地図に入れる情報を考えた。（高橋信）

出入り口や段差　当事者と町歩き意見交換

おはらい町関係者や小学生、皇学館大生が、障害者の協力を得て、三回にわたって、伊勢神宮の両宮周辺を実際に歩く。参加者らによる意見交換を経て、十二月にはマップデータを完成させる計画。市では紙のほかに、視覚障害者なども楽しめるよう、音声での地図も作る予定だ。

十四日は、参加者らが実際に店に入るなどしながら「入り口は滑らかだけど出口はちょっときついね」などと確認していた。

全盲の自営業勢力潤さん(六九)＝同市岡本＝は「路上の立て看板に隙間があると、つえが通り抜けて何もないと錯覚するが、看板の高さが低かったので気付けた。付き添いがいれば買い物もできるし観光も楽しめる」と満足げ。車いすを利用しているパート職員玉川敬子さん(四二)＝松阪市市場庄町＝は「店内に段差があってもお願いすれば、屋外に机を準備してくれる店もあった。地図にそういう情報があれば、選択肢が増えると思う」と話した。

商店主らでつくるおはらい町会議の前田世利子会長(六二)は「日常の小さな気付きというものは当事者でないと分からない。どんな人にとっても心地よい場所であるよう、会員で共有するなどして努力していく」と意気込んだ。

おはらい町通りの店の出入りしやすさを確認する玉川さん（手前）＝伊勢市宇治中之切町で

2020年（令和２年）８月19日（水）伊勢新聞　掲載

障害者ら「まち歩き調査」

伊勢の外宮参道　バリアフリーマップ作成へ

障害者ら「まち歩き調査」

伊勢の外宮参道　バリアフリーマップ作成へ

【伊勢】身体や視覚に障害を抱える人々に配慮したバリアフリー観光マップの作成に向けて、伊勢市は十八日、同市本町の外宮参道で「まち歩き調査」を実施し、当事者となる障害者や地元小学生など約三十人が課題などを探った。

同市は東京パラリンピック大会に向けてラオスの陸上チームの事前合宿を招致したことをきっかけに、共生社会ホストタウンとして昨年登録された。

このうちユニバーサルデザインを取り入れた観光推進活動の一環として、伊勢神宮内宮前と外宮前の二ヶ所での観光マップの作成を企画。現地調査を基にマップ案を作成し、市内観光案内所等を通じて来年二月以降からの配布を目指す。

内宮前に続く第二弾として実施したこの日は、障害を抱える市民をはじめ、観光を通じて伊勢の魅力や課題などを学習する地元小学生や皇學館大学の学生らが参加。四班に分かれて約四百㍍の参道を歩きながら、段差や看板の設置状況、掲示物の見やすさなどを点検して課題を共有した。

視覚に障害を抱える伊勢市岡本一丁目の勢力潤さん（六）は「杖を使う方が転倒しないように看板の場所や側溝のふたの隙間の大きさなどを見て回った。ラオスの方に伊勢を楽しんでもらえたら」と話していた。

（小林哲也）

バリアフリーマップの作成に向けて段差などを確認する参加者ら＝伊勢市の外宮参道で

2020年（令和２年）11月13日（金）中日新聞　伊勢志摩版掲載

視覚障害者の観光　遠隔案内

おはらい町で実証実験

皇学館大生　映像見て景色など説明

視覚障害者の観光 遠隔案内

おはらい町で実証実験

カメラを用いた遠隔案内で、視覚障害者の観光を支援する取り組みの実証実験が十一日、伊勢神宮内宮（伊勢市宇治館町）近くのおはらい町であった。参加した視覚障害者は、カメラから送られてくる映像を見た案内役の解説に耳を傾けながら、観光を楽しんでいた。（高橋信）

実験は、伊勢市がNPO法人「伊勢志摩バリアフリーツアーセンター」（鳥羽市）に委託し、実施した。伊勢市は、東京五輪・パラリンピックの共生社会ホストタウンとして、障害がある人にも観光を楽しんでもらうための地図「バリアフリーマップ」作成に取り組んでいる。地図は視覚に頼る部分が多く、視覚障害者にも観光を楽しんでもらう試みとして遠隔案内の実験をした。

耳元に装着したカメラで映像を送信しながら観光を楽しむ勢力さん㊐＝伊勢市宇治中之切町のおはらい町で

皇学館大生 映像見て景色など解説

実験では、視覚障害者が、頭部にカメラを装着し、スマートフォンやタブレット端末を通じて遠隔地にいる案内役のパソコンに映像や現在位置を送信する。案内役は映像を見て、観光地の景色などを解説する。

同NPOの野口あゆみ事務局長(四九)によると、観光に同行する案内役は道路などの危険察知に集中するため、観光情報を提供しそこねることもある。観光と歩行の案内を分けることで、視覚障害者は観光をより楽しめるという。また盲導犬を連れていれば、一人で楽しむこともできる。

実験は、九日に続いて二度目。皇学館大（同市）の学生の遠隔案内で、二人の視覚障害者がおはらい町を歩いた。学生六人は三チームに分かれ、パソコンで現在位置を確認するなどしながら、飲食店のメニューを読み上げたり、紅葉の様子を説明したりしていた。

案内にてこずっていた同大現代日本社会学部二年の行方洸太さん(二〇)は「メニューの文字が見えづらくて難しかった。またリベンジしたい」と話した。

案内を受けた勢力潤さん(六九)は「家族との観光も楽しいが、家族は細かい説明を面倒くさがることもある。ガイドがついてくれると楽しみが広がる」と満足げだった。

パソコンで映像を確認しながら案内する皇学館大生＝伊勢市宇治中之切町の神宮会館で

2021 年（令和３年）２月 10 日(水)　中日新聞　掲載

聴覚障害者が自宅で旅気分

おかげ横丁舞台　オンラインバスツアー

ライブ中継、伊勢うどんに舌鼓

ライブ中継、伊勢うどんに舌鼓

聴覚障害者が自宅で旅気分

おかげ横丁舞台　オンラインバスツアー

新型コロナウイルスの影響で県境をまたぐ旅行が難しい中、自宅にいながら旅行気分を味わってもらおうと、今月上旬、伊勢神宮内宮前のおかげ横丁を舞台に聴覚障害者向けの「オンラインバスツアー」が開かれた。オンラインといっても、画面上で観光地の映像をながめるだけではない。手話ガイドによるライブ中継があったり、事前に届けられた赤福餅や伊勢うどんをツアー中に食べたり。楽しめる工夫が随所に凝らされていた。（斉藤和音）

自宅で伊勢うどんを味わう参加者ら＝県提供

「皆さん伊勢に行ったことはありますか」。ツアーを担当する琴平バス（香川県）のガイド役山本紗希さんが、東京や岡山など全国からテレビ会議システムで参加した十五人の聴覚障害者に呼び掛けた。県聴覚障害者支援センターの職員が即座に手話通訳し、画面上には字幕も映し出された。

ツアーは早朝七時から。「おかげ横丁には江戸時代の町並みを再現した店舗が約六十店舗並び、食べ歩きも楽しめます」。地元のボランティアグループ「いせてらす手話ガイド」の二人が、ライブ中継で現地の様子を伝える。老舗和菓子店「赤福」が毎月一日に月替わりで限定販売する「朔日（ついたち）餅」の買い方や朝市のにぎわいも紹介した。

朝市の紹介では、地元名産の伊勢うどんが登場。「軟らかくて、見た目が真っ黒な」とガイドが説明した味は、やはり食べてみないと分からない。参加者は、事前に自宅に送られていた伊勢うどんを休憩中に調理し、一斉に味わった。旅先で定番の記念写真は、うどんを食べる様子を画面保存（スクリーンショット）で撮影した。事前に撮影した朔日餅を購入する映像を流したり、伊勢神宮に関するクイズをしたりと、あっという間に一時間ほどの「旅」は終了した。「伊勢うどんも赤福も初めて食べたが、おいしかった。伊勢に行ってみたいと思った」「オンラインだけど、実際に行った気分になれた」と参加者からの評価は上々だった。

地元の手話ガイド　現地の様子配信

手話でおかげ横丁について説明する「いせてらす手話ガイド」のメンバー＝伊勢市宇治中之切町で

コロナ禍で観光バス業界は苦境に立たされている。琴平バスのオンラインでの試みは、ツアーが軒並み中止となっていた昨年五月に始まった。県内が舞台となったのは今回が初めて。楠木泰二朗社長(四三)は「将来の誘客につながることをゴールにしている」と話す。

リアルなツアーとは違う手応えも感じている。マスクを着用する生活が定着した今、聴覚障害者は口の動きが読み取れず、意思疎通に困難さを感じることも多い。その半面、オンラインツアーでは手話通訳や字幕を活用することができる。楠木社長は「来日が難しい海外の人向けのツアーなど、いろいろな可能性があると思ってチャレンジしていきたい」と意気込んだ。

2021年（令和３年）３月16日(火)中日新聞　伊勢志摩版掲載

視覚障害者も観光満喫

伊勢でモニターツアー

視覚障害者も観光満喫

障害がある人も楽しめる観光ツアーを提案する「伊勢志摩バリアフリーツアーセンター」（鳥羽市）が二月、伊勢市内の事業者と連携して、視覚障害者向けのモニターツアーを実施した。受け入れる側の事業者の育成が目的で、参加した事業者側の実際の対応ぶりや、そこから出た課題を見てみた。（足達優人）

見聞いせしま

伊勢でモニターツアー

同センターが計画したモニターツアーには、新たに障害者向けの観光ツアーを考えているバス会社「伊勢国際観光」や、センターの取り組みに賛同したかまぼこ製造販売の若松屋、クラフトビールを製造する二軒茶屋餅角屋本店が参加。事前の研修で視覚障害者への対応や注意事項を学び、本番に臨んだ。

モニター役としては、一泊二日の日程で、県内在住の視覚障害者や介助者の計八人が参加。若松屋では、かまぼこ作りに挑戦してもらった。

歯のないつけ包丁を片手に持ち、かまぼこの材料を木の板の上に張り付け、形を整える作業。同社の体験指導担当のパート、辻愛さん(五〇)は、「（生地を）つぶすような、押すような感じで柔らかくしていって」「右に左に動かして生地を延ばして」と、聞いて理解できる説明を、ゆっくりとしゃべって指導した。

視覚障害者への対応は初めてだったという辻さんは「板の上の状態が想像できるような説明を心掛けた」という。普段の体験会は、一通りの作業を見てもらってから開始するが、「視覚障害者の人たちには、一緒にやりながらしか指導できないと思った」とも話した。

二軒茶屋餅角屋本店が手掛けるクラフトビールの製造工場（下野町）の見学では、佐々木基岐工場長(三三)が案内役を務めた。

「モルトの食べ比べ」で甘みや苦味の違いを区別し、十リットルのビールが入るタンクを実際に持たせるなど、普段の工場見学ではやっていない、触れて、味わって体験する方法を実践してみた。誰が話し手なのかが分かるように、最初に「佐々木です」と声を掛けてから案内した。

名張市から参加した井上スズ子さん(六七)は「視覚障害の立場を考えて、こまごまと説明や案内をしてくれた。勉強してくれたんだなと、心配りを感じた」と喜んだ。

伊勢神宮外宮前の「外宮参道」では、遠隔で観光案内ができる機器の実証実験も行った。

視覚障害者の耳付近に着けた小型カメラに写る景色を、別の場所で待機する人がパソコンの画面で見ながら、商品や場所の説明をする仕組み。案内役をした「お伊勢さん観光ガイドの会」の伊東哲也さん(七〇)は「（使用者が）どこにいるのか分かりにくく、段差やスロープがあるかなどを事前に把握しなくてはいけないと感じた」「双方向で話しながら案内できるのは良かった」などと話した。

伊勢神宮外宮を案内した伊勢国際観光の橘俊亮・運行管理兼営業部長(四三)は「人と人なので、コミュニケーションを取れば問題ない。見えていない人に、どこから説明すれば良いのか、くどくならない程度に具体的に伝える方法などを考えないといけない」と、課題を整理。同センターの野口あゆみ事務局長(四七)は「実験を通じて『自分たちでもできる』という声が広がっていけば良い」と総括した。

上手を添えながら作業を教える辻さん㊎＝伊勢市下野町の若松屋かまぼこ工房で

下モルトを手に取り味わう参加者ら＝伊勢市下野町の伊勢角屋麦酒下野工場で

参拝の仕方を説明する橘さん㊎＝伊勢市の伊勢神宮外宮で

静岡県におけるユニバーサルデザインの推進

１　要　旨

ユニバーサルデザインの理念普及と実践促進を図り、住む人も訪れる人も快適に安心して過ごせる地域づくりを進めるため、第５次ふじのくにユニバーサルデザイン行動計画に基づき、ハート・ソフト・ハードの各分野において全庁的に取組みを進めている。

２　第５次ふじのくにユニバーサルデザイン行動計画の概要

(1) 本県における位置づけ

・ 本県の新ビジョン（総合計画）において、「(政策）誰もが活躍できる社会の実現－（政策の柱）誰もが理解し合える共生社会の実現」の中に位置付けられる分野別計画　※くらし・環境部県民生活課が取りまとめ

・ 計画期間は 2018～2021 年度の４年間

(2) 取組内容

・ ハート・ソフト・ハードの各分野がバランス良く進捗する取組み

・ 第４次行動計画で進捗が遅れ気味であったハート分野の取組強化

＜施策体系＞

区　分	施策体系
【ハート】 誰もがお互いに思いやり共生する社会づくり	・心のＵＤを実践できる人づくり ・誰もが活躍できる共生の社会づくり
【ソフト】 誰にも優しく魅力的なｻｰﾋﾞｽ・情報や製品の提供	・おもてなしの心あふれる顧客サービスの提供 ・誰もが様々な場面で必要な情報を得られる環境づくり ・使いやすく魅力ある製品の開発及び利用の促進
【ハード】 誰もが快適で過ごしやすいまちづくり	・利用しやすく配慮された施設(建物、公園等)や住宅の整備 ・安全で利用しやすい道路、歩行空間や交通機関の整備

＜代表指標の現状値＞

分野	区分	指　標	現状値 ※直近の実績値	目標値 (R3 年度)
ハート	成果指標	困っている人を見掛けた際に声を掛けたことがある県民の割合	(R2 年度調査) 34.2%	33.3%
	活動指標	ユニバーサルデザイン出前講座の実施回数	(R2 年度調査) 30 回	毎年度 30 回
ソフト	成果指標	県内企業、団体等のユニバーサルデザインへの取組割合	(R1 年度調査) 50.8%	55%
	活動指標	工業技術研究所によるユニバーサルデザインに関する研究開発技術指導及び相談の件数	(R2 年度調査) 366 件／年	500 件／年
ハード	成果指標	誰もが暮らしやすいまちづくりが進んでいると感じる県民の割合	(R2 年度調査) 53.8%	75%
	活動指標	通学路合同点検等に基づく要対策箇所対策達成率	(R2 年度調査) 85.1%	100%

※このほかに 32 の個別指標を設定している。

＜令和２年度の具体的な取組事例＞

担当部局	内　　容
全部局	○ユニバーサルデザインの理念を取り入れた学校、病院、庁舎、スポーツ施設などの県有建築物の整備
くらし・環境部	○相手のことを思いやり、さらに一歩進んで行動する「心のＵＤプラス」の促進を目的とした、障害者や高齢者等への対応を想定した実践講座の実施（令和２年度はオリパラ都市ボランティア向け） ○企業・団体等におけるＵＤ取組事例の情報発信 ○福祉のまちづくり条例対象建築物の整備基準への適合推進 ○県営住宅におけるエレベーターの設置、段差の解消、手すりの設置等の整備
スポーツ・文化観光部	○ユニバーサルツーリズム推進のための宿泊施設、観光施設におけるバリアフリー化に係る備品購入経費助成
健康福祉部	○駅ホームからの転落事故等を未然に防止するために障害のある方に対する声かけを行うサポーターの養成 ○ヘルプマークの普及推進 ○「ゆずりあい駐車場制度」の普及推進、協力施設確保 ○ユニバーサルデザインタクシー購入経費助成
交通基盤部	○通学路合同点検に基づく対策実施 ○水辺の交流拠点の整備（河川・港湾）